

「弱い者に最もしわ寄せ」

引き裂かれる 子どもたち

離婚を巡る子どもの奪い合いの実態を描き、解決への糸口を探った連載「引き裂かれる子どもたち」(4月256日の朝刊)には、7日までに120件を超える意見が手紙やメールなどで寄せられました。一部を紹介します。

■現状への不満
最も多かったのは、連載の2回目で紹介したケースのように、子どもを一方的に連れ去られたという人たちからの意見だった。

「1年前に妻に子どもを連れ去られ、電話やメールも一切できない」。こんなメールを寄せた40歳代の男性は、8か月ぶりに会った子どもから「もう会いたくない」と言われたという。「良好な親子関係を築くには、一緒に過ごす時間が必要なのに、別居している間に悪口を吹き込まれ、それもできない。両親の同意がない子どもの連れ去りは禁止すべきだ」と訴えた。

連載のケースと同様に、子どもを連れ去られた後、裁判所で虚偽のDV(配偶者間暴力)を申告されたと訴える声

も目立った。

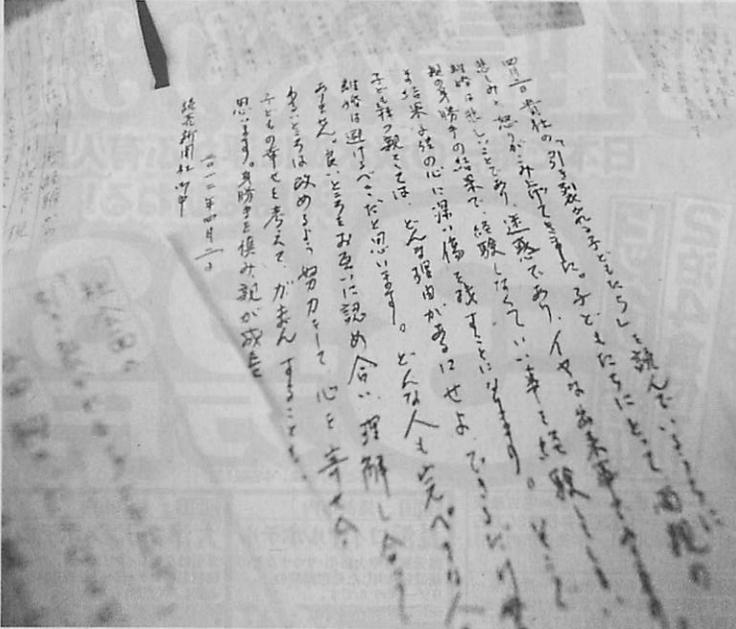
一方で、12年間にわたり深刻なDVを受け、小学生の娘を連れ、夫から身を隠して暮らしているという女性は「助けを求めた子育て支援センターで『親権が欲しいから騒いでいるでしょ』と言われ、とても傷ついた」と明かした。

離れて暮らす子どもと会えない現状に不満を抱いている人が多く、養育費をたてに、子どもとの面会を強要する例を取り上げた連載3回目には、きちんと養育費を支払っている父親から反発もあった。東京都八王子市の男性(42)は

「母親が理由もなく子どもと会わせないとき、『払うもの払っているのだから会わせろ』という方向に持って行かざるを得ない」と強調した。

■すさまじい現実
親の離婚で子どもが傷つく姿を間近に見ている人からは、親の自覚を促す声が多く寄せられた。

裁判所で調停委員を務める女性(57)は、「親権の争いは、子どもを巻き込み、大人が想像する以上に心を傷つける。離婚する親は、子どものためにできることは何かを考えなければいけない」と求めた。



連載に寄せられた意見には「悲しい思いをするのは子ども」と嘆く声が多かった

親の自覚 促す声多く

120件超す反響

ボランティアとして小学校で相談員を務めている東京都西東京市の嶋田安民さん(63)は、「親権争いに巻き込まれるなどして、多くの子どもたちの心が引き裂かれていくのを見てきた。全国で、不幸な子どもたちが増え続けていることに心が痛む」と思いやっていた。現在、妊娠中という都内の主婦30は「すさまじい現実。親に目の前で奪い合いをされる(子ども)つらさを考え、悲しくなった。子どものために別れないという気持ちで薄れているのだと思う」とつぶやいた。

■子どもの痛み
親が離婚した人たちは、それぞれの「痛み」を明かしてくれた。

「母から父の悪口を聞いていたころは、とても苦しかった」という神奈川県的女性(21)は、別居中だった父親と話す機会を得て、離婚に納得することが出来たという。

「(今は)自分の意思で両親に会えるが、小さい子どもにとっては、面会を支援する第三者の存在がとてもありがたはず」と思いを寄せた。

幼いころに両親が離婚した東京都練馬区の女性(41)は、「わがままを言うと、どこかに出されてしまうのではと、不安で泣きながら目を覚ます夜が続いた」と振り返り、「弱い者に最もしわ寄せが来るということを知ってほしい」と締めくくった。